

一般社団法人 日本生態学会

ニュースレター

No.70

2026 年 9 月

女子中高生夏の学校 2026 実施報告..... 1

記事

I. 2027 年からの『日本生態学会誌』の年 1 号化および
入会及び会費規則改訂について..... 4

II. 書評依頼図書..... 4

III. 寄贈図書..... 4

書評..... 4

京都大学生態学研究センターニュース..... 7

女子中高生夏の学校 2026 実施報告

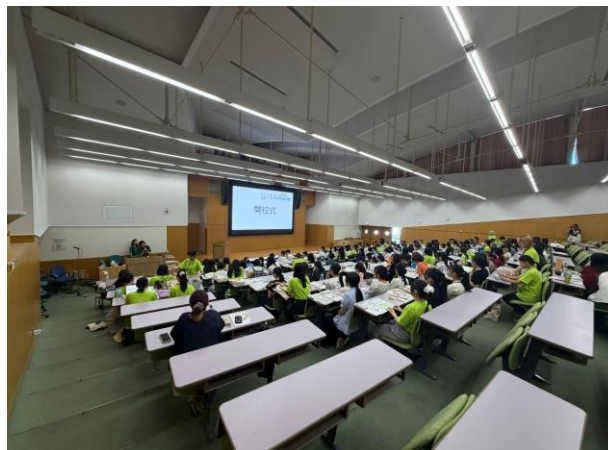
丸岡奈津美、曲雅慧、松崎愛海、佐藤光彦、高野（竹中）宏平、鈴木智之

女子中高生夏の学校（通称：夏学）は、女子中高生の理工系進路選択支援事業として 2005 年より開催されている。当初は科学技術振興機構（JST）の補助事業として、男女共同参画学協会連絡会・国立女性教育会館（NWEC）などの協力のもと行われていた。2018 年に NPO 法人女子中高生理工系キャリアパスプロジェクトが設立され、学協会や企業からの寄附金をベースに、様々な団体、企業、個人の支援のもと発展してきた。

2019 年までは、全国的女子中高生を対象に、埼玉県嵐山町の国立女性教育会館で 3 泊 4 日の合宿形式で、サイエンスカフェや実習などを実施してきた。新型コロナウイルス感染症のため、2020 年はキャリア相談など一部のみが、2021、2022 年には実習なども加えて、オンラインで実施された。2023 年からは 2 泊 3 日で合宿形式が復活。国立女性教育会館の宿泊施設の閉館に伴い、2025 年から東京都渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センターでの開催となった。日本生態学会は 2008 年から毎年実習に講師を派遣し、2016 年からはポスター展示、キャリア相談等にも参加している。



2026 年は 8 月 8 日（土）～10 日（月）にオンライン開催され、全国 35 都道府県から 99 名の生徒が参加した。34 名の学生 TA（大学生・大学院生）と 47 団体の協力で、実験実習やポスター・キャリア相談、学生企画プログラム、保護者向けプログラムが行われた。



1 日目はキャリア講演、クイズ、他己紹介、学年の近い参加者との話し合い、TA との対話等、2 日目は実験・実習「ミニ科学者になろう」、ポスター展示「研究者・技術者と話そう」、「進路・キャリア相談カフェ」、学生企画「キャリアプランニング（タイムラインの作成）」と夕食後の「交流会」等、3 日目は学生企画「キャリアプランニングの発表とディスカッション」等が開催された。夏学 2026 の実施要項やフライヤーはサイトで公開されているので、詳細はこちらをご確認いただきたい。今年度のブックレットの表紙には、昨年度生態学会として実験・演習の講師を担当した丸岡が掲載されている。





9日午前の実験・実習「ミニ科学者になろう」では、2時間半に渡り16団体が実習を実施した。その事前準備として荷物の発送と前日に会場での受け取り、机や顕微鏡のセッティングなどをした。生態学会からは東北大学の丸岡が講師を務め、キャリア支援専門委員の高野と佐藤がスタッフとして参加した。

生態学会の実習タイトルは「顕微鏡で動物プランクトンを見てみよう!」で、5名の生徒(高校1年生4名、高校2年生1名)が参加した。顕微鏡で生きたミジンコを観察し、体の構造や生活環を解説しながらクイズ形式で雌雄を判別した。産卵直前のメスが見つかったため産卵の瞬間を観察した。さらに湖沼で採集した固定標本も使い、ミジンコ・ケンミジンコ類の種同定を行った。同じ「ミジンコ」と呼ばれる種も多様であることを随時解説しながら、生徒たちは種同定の難しさと種多様性を体験した。



丸岡と高野、佐藤は9日午後「研究者、技術者と話そう」にてポスター発表に参加し、キャリア支援専門委員会で作成したポスターを用いて学会を紹介した。個別の質問やキャリアの相談にも対応した。各ブースでシールやサインを受け取るスタンプラリー形式で、できるだけ多くのポスターを回るよう工夫がなされていた。並行してキャリア相談カフェも実施されていたが生態学会からは参加しなかった。

ポスターブースには生物全般、生物多様性の保全、ボルボックスなど個別の生物に興味を持つ生徒が立ち寄ってくれた。会場周辺の動植物を採取、展示して興味を引くとともに、身近な生物の観察から生物の不思議や生態学の魅力を紹介し、生態学を学べる大学の学部学科、卒業後の進路や大学入試等を紹介した。昨年に引き続き、ポスターでロールモデルとして紹介させていただいた黒江美紗子氏、坂田ゆず氏、石田祐子氏、吉井千晶氏、寺田佐恵子氏に改めてお礼申し上げる。





今年の TA 募集は 4 月 2 日～30 日に行われた（対象：理工系に在籍する女子大学生、大学院生で、交通費の都合上、関東圏から参加できる方を優先）。曲・松崎は、クイズやトークなどの学生企画イベントに TA として参加し、主に生徒との交流を担当した。多くの生徒が将来の夢や目標をすでに持ち、真剣にキャリアプランを考えている姿が印象的であった。当初は進路に迷っていた生徒にとっても、本イベントは自身がこれまで抱えてきた興味関心を手がかりに、将来やりたいことを見つめ直すきっかけとなっていた。生徒同士や、理系で活躍されている社会人や研究者、そして少し先を歩む TA との交流は、不安を和らげ、これまで漠然としていた理系進学後の姿や研究者としてのキャリアを具体的に思い描く機会になったと感じる。さらに、TA 同士でも、普段関わることの少ない異分野の学生と交流し、進学や研究生活に関する考えを共有できたことは大きな収穫であった。本イベントは、生徒にとってだけでなく、TA にとっても新しい学びや出会いを得られる場であり、今後も多くの人に参加してほしいと感じた。このような機会を継続的に提供することは、理系への進学を考える中高生にとって進路選択の後押しとなり、理系の人材の裾野を広げることにもつながると考える。



キャリア支援専門委員会では、女子中高生への啓蒙活動として今後も継続して参加する予定である。また、若手会員のキャリア形成の一助として今回の実習のような外部イベントの講師を今後も公募する予定である。興味のある方は教育活動の一環として積極的にチャンスを活用してほしい。（写真は夏学事務局より提供され、各団体の広報媒体への掲載については、生徒の顔がはっきり映ってない写真の使用が許可されています。）



記 事

I. 2027 年からの『日本生態学会誌』の年 1 号化および入会及び会費規則改訂について

2026 年 8 月 17 日にメールによる代議員臨時総会審議を実施し 2027 年からの日本生態学会誌年 1 号化に伴う入会及び会費規則改訂について全会一致で決議されました。

2027 年より日本生態学会誌の発行は毎年 9 月の 1 回で、冊子購読費は据え置きとなります。

II. 書評依頼図書 (2026 年 2 月～2026 年 7 月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方はご所属・氏名・住所・書名を学会事務局(office@esj.ne.jp)までお知らせ下さい。なお、書評は 1 年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 真野佳博・木岡紀幸編著「ポイントがわかる分子生物学 第 3 版」(2025) 194pp. 丸善出版 ISBN:978-4-621-31203-2
2. B.ガステル・R.A.デイ著 美宅成樹訳「世界に通じる科学英語論文の書き方 原書 9 版」(2026) 430pp. 丸善出版 ISBN:978-4-621-31260-5
3. カート D.ファウシュ著 東知憲訳「エッセンス・オブ・リバーズ 川を愛する科学者の発見の旅」(2025) 336pp. A&FBOOKS ISBN:978-4-909355-51-5
4. 日本環境毒性学会編「環境毒性学」(2026) 384pp. 丸善出版 ISBN:978-4-621-31232-2
5. 道上達男・阿部光知・末次憲之・坪井貴司編「ノーベル賞論文に見る生命科学研究の思考法」(2026) 226pp. 丸善出版 ISBN:978-4-621-31269-8
6. ハンナ・ルイス著 藤原一繪監訳 浦田未央訳「ミニフォレスト革命 最速で世界に森を再生している宮脇方式」(2026) 200pp. 丸善出版 ISBN:978-4-621-31281-0
7. 広中平祐編集委員会代表「第 2 版 現代数理科学事典 (分冊普及版) 第 2 巻 生命の数理」(2026) 188pp. 丸善出版 ISBN:978-4-621-31253-7
8. 日本昆虫科学連合編「昆虫科学の最前線」(2026) 488pp. 丸善出版 ISBN:978-4-621-31265-0
9. 三上修著「古文鳥類学 平安貴族が愛でたのは本当にホトトギスなのか」(2026) 142pp. 岩波書店 ISBN:978-4-00-029743-1
10. 工藤岳著「大雪山のお花畑で僕が考えたこと」(2026) 176pp. 文一総合出版 ISBN:978-4-8299-7113-0
11. 松本忠夫・前川清人・三浦徹著「シロアリ-生態・社会性・進化-」(2026) 456pp. 共立出版 ISBN:978-4-320-05851-4

III. 寄贈図書

1. 「科学教育振興助成 2024 年度成果報告書」(2025) 500pp. 公益財団法人中谷財団
2. 「公益財団法人中谷財団 科学教育振興助成 2025 年度成果報告書」(2026) 492pp. 公益財団法人中谷財団
3. 「ハープソン Hokkaido 2021-2025 結果報告書」(2026) 32pp. 北海道爬虫両棲類研究会
4. 「東京大学大気海洋研究所要覧 2026」(2026) 65pp. 東京大学大気海洋研究所
5. 「特定非営利活動法人コウモリの保護を考える会紀要東北のコウモリ第 3 号」(2026) 40pp. 特定非営利活動法人コウモリの保護を考える会
6. 「公益財団法人岩谷直治記念財団 機関誌『needs』2026 第 52 号」(2026) 136pp. 公益財団法人岩谷直治記念財団
7. 「公益財団法人岩谷直治記念財団 研究報告書 2026 年度 Vol.49」(2026) 255pp. 公益財団法人岩谷直治記念財団
8. 「鹿島学術振興財団 50 年史」(2026) 209pp. 公益財団法人鹿島学術振興財団
9. 「公益財団法人内藤記念科学振興財団 内藤財団時報 第 118 号」(2026) 121pp. 公益財団法人内藤記念科学振興財団

書 評

日本サンゴ礁学会(監修)／梅澤 有・鹿熊 信一郎・栗原 晴子・高橋 そよ・山下 洋・山野 博哉編「サンゴ礁の世界—多面的に観る・知る・科学する—」(2026) 192pp. 朝倉書店 ISBN: 978-4-254-17207-2 定価 5280 円

サンゴ礁について、地形と種類、生物、ツール、文化、危機、保全・教育の 6 章から多角的に論じる、まさに超学際書籍である。多様な分野の、私個人にとっても様々な機会に知り合った執筆者がいる。カラー図版を含む 2 頁または 1 頁読み切りで、巻末の文献も役立つ。太平洋やアフリカの頁もあるが、琉球列島の成り立ちはサンゴ礁なくては語れないことが、地形から人々の暮らしまで、よく分かる。

サンゴ礁の主役は脊椎動物や種子植物ではないから、生物の章構成は独特だ。サンゴ自体は刺胞動物門に収まるが(6 頁)、藻類を語るには最新の分類学体系が必要だ。海藻の種多様性に比べ海草が 60 種しかいない(50 頁)など、説明がわかりやすく、恥ずかしながら大いに勉強になった。

本書は自然保護とともに、サンゴ礁の恵みに支えられて生きる沖縄や島嶼国の暮らしを知り、守ることを主眼としている。これも超学際書籍の強みと言えるだろう。アオウミガメが種全体及び沖縄と小笠原がそれぞれ属する東インド洋-西太平洋個

体群と中西部太平洋個体群について 2025 年の IUCN レッドリストで絶滅危惧から外れ低懸念になったが、2026 年の環境省レッドリストでは依然として個体群を区別せずに VU とする(57 頁)などの最新知見がある。ただし、ブラネタリー・バウンダリーは 2023 年の評価で 6 項目が限界を超えたと書いているが(141 頁)、2025 年評価では肝心の海洋酸性化が限界を超えたとされ 7 項目である。かように、原稿から出版時点でも状況は変わる。温暖化によりサンゴ各種は「年平均 14km」で北上しており(9 頁)、安房勝山や真鶴などを北限域(11 頁)とする説明も、近未来には古くなるかもしれない。

琉球列島の海岸段丘の成り立ち(5 頁)や共生褐虫藻の獲得過程(32 頁)、動物プランクトンがサンゴ粘液由来の養分に依存している可能性(45 頁)、スナギンチャクの新分類(47 頁)など、近年の新知見、執筆者自身の成果や未解決問題も随所に記される。

前半の 3 つの章も理系分野に留まらず、多良間島の地下水過剰取水の危険性、沖ノ島島の生態工学的保全など、わかりやすく図解されている。第 3 章は分野でなく新ツールに的を絞り、リモセン、CO₂分圧、安定同位体、環境 DNA、超音波発振器、重金属などを用いた新知見を紹介している。

第 4 章では「(世界) 最古の人類遺跡をもつサンゴ島は宮古島」であり(81 頁)、太平洋の神話や琉球の歌、古文書にあるサンゴ礁の記述、漁撈文化、地形や魚種名、漁具から民俗知、養殖と観光という産業利用を紹介する。途上国や沖縄も全球化と無縁でないことがよく分かる。与論島で本土復帰時にできたホテル廃墟が現在も残るというのは考えさせられた。ちなみに、103 頁にある石干見の説明は図解が欲しかったが、112 頁の図③に該当するようだ。

第 5 章の始めに、人新世についての国際地質科学連合の詳しい検討過程の説明がある。その中で未来の地質学者は、「人新世の地層にコンクリートやプラスチック、多くの生物種の絶滅など、人間活動の証拠を見出す」と述べている(115 頁)。今後の絶滅速度と継続年数次第だが、生物で確実に残る地質の痕跡は大量絶滅ではなく、家畜や人間の骨が世界各地で膨大に増えたことだろう。また、「世」区分に値するかは別として、サンゴ礁が激減して「リーフギャップ」が地層に残る可能性などを論じていただくとお面白かった。いずれにしても、白化の深刻さを改めて感じる。前半で説明されたサンゴと共生「も」する褐虫藻という共生関係が生きる構成だ。温暖化、酸性化、感染症、食害、栄養塩、濁水、台風・海面上昇など、負の人為影響ばかり列挙されているが、パラオ共和国の酸性環境に適応して生息するサンゴのコラムがある(137 頁)。その研究が保全策に生きるかもしれない。

第 6 章は、悪環境下でも生きる「強いサンゴの不思議」に始まり、モズク養殖のブルーエコノミー、自然再生事業、海洋保護区、サンゴ養殖、サンゴマップや長期モニタリングにおける市

民科学の貢献、群集再生の取り組み、オニヒトデや赤土対策、普及啓発教育活動や喜界島の研究所など、希望も感じさせる。

本書を読んで、日本サンゴ礁学会の多様性に改めて感銘を受けた。生態学会員が学ぶべき点多々あると思う。執筆者一人ひとりに、分野を超えて為すべきことを考えるサンゴ礁への危機感と情熱を感じる構成であった。

松田裕之(横浜国立大学/アースウォッチ・ジャパン)

早矢仕有子著「カムイのフクロウ・シマフクロウを追う」
(2026) 192pp. 東京大学出版会 ISBN: 978-4-13-063968-2 定価 3520 円

本書の肝は、96 頁にある家系図だろう。著者の前著「シマフクロウ 家族の物語」(2022 年、北海学園大学出版会しまふくろう新書)にも共通するが、本書副題の通り、著者が追ったシマフクロウの家系図だ。よく見ると、86F と書かれた雌と孫雄(97M)が番になっている。もう一つ、母の異父弟にあたる叔父(13M)と番う雌(93F)もいる。94M と 00F は兄妹で番っているが、「たがいに血縁認識している可能性も捨てきれないが」、「偶然の産物と考える方が自然に思える」(97 頁)。近親婚が多かったエジプトのファラオの家系図顔負けの複雑さだ。

この図は著者が、この家系の繁殖記録を、長いポストク時代を含む 37 年間追跡した賜物である。前著の後も更新中だが、こうした努力が環境省の種の保存法に基づくシマフクロウ保護増殖事業を支えていると実感する。日本の猛禽類には、種ごとに熱心な研究者がいるが、そろそろ、研究者の方も世代交代が必要な時期である。この図には 2011 年生の雄を意味する 11M と書かれた個体が初版では 3 羽いるが、最右列のそれ(02M)の下。その左の 11M は 11F の誤植のようである)が、「ちび」と著者が名付け、シマフクロウ保全の広告塔たる親善大使となり、施設の中で 9 歳で亡くなった神経性異常をもつ個体である(134 頁)。

本書は、随筆としても読み応えがある。「おわりに」は、ある朝日歌壇の入選作の引用で始まる。論文と同様の科学的考察や根拠となる巻末文献はあるが、主観的な形容詞が盛りだくさんで、読んでいて楽しい。押し付け感がなく、さり気ない記述の中にどんな苦労や失敗があったかが忍ばれ、共感を呼ぶ。また、絶滅危惧種を紹介する書籍にしては、保護活動の良い面も課題も自由に記述している点にも、個人的にはありがたい。「餌付け観光」は考えさせられ、営業場所非公開の猛禽類の巢内の子育ての様子をライブで限定公開する工夫に感心した(152 頁)。

シマフクロウの保全に、最も個体数が少なかっただろう 1990 年頃より前から関わってきた著者の言葉には重みがある。環境省や林野庁との関係、個々の担当者との付き合い、在野研究者の努力など、行政文書だけでは知り得ない内容が多々ある。

「河川沿いの天然林内ですら」「伐採計画があることに最初は驚いた。それは悪意によるものではなく、情報を共有できていないことが原因だったのだが。何度も話し合い、その森林にすむシマフクロウつがいの行動権面積の約八割が保護林になった。」という記述の中に、著者の並々ならぬ努力が透けて見える。また、「(胸高) 直径」のような書き方に、大学の講義で学生に伝わりにくい術語がないか、日頃注意している様子がうかがえる。

本書は白黒印刷だが、105-107 頁の天然営巣木など、カラー図版が見たい。著者の大学サイトに巣箱の写真はある (<https://rc-hgu.jp/hayashi/>)。著者推しの『観文禽譜』関根雲停の島梟は今のところある個人サイト (<https://www.photo-make.jp/hm-2/bird-tonosama-b.html>) 上にある。本書の感想や補足情報、気に入った部分を読者が書き込み合う Blog サイトがあれば、さらに面白いかもしれない。

本書と前著は、著者が追ったシマフクロウ一族の物語というだけでなく、著者自身の自伝の側面がある。本書出版直前に日本鳥学会長になったという話は書かれていないが、1989 年の大学 4 年生の頃から、前著の後の 2023 年の雛の記録まで、研究者となり、保護活動に立ち向かった足跡もうかがえる。多くの関係者に助けられた感謝の念が滲み出る。絶滅の危機をひとまず脱した成功譚であると同時に、文章の端々に、著者の人となりが忍ばれ、読者の心を動かすだろう。著者は控えめだが、二百年後まで、後世の読者にも読んで頂きたい。不滅の東大出版には、もし絶版にするなら著者の死後 70 年後に PDF を公開いただきたい。絵本のネタになる話も随所にありそうだ。さらに、前著と併せて、英訳の出版をどこかに検討いただきたい。機械翻訳が発達し、論文は急速に言語の壁がなくなりつつあるが、紙の書籍はすぐには英語文化圏に届かないだろう。シートン動物記の一節に劣らぬ価値がある。

ぜひ、当会会員は、晩年に本書のような自身の集大成を著すことを目標に、励んで頂きたい。依頼されて初めて筆を執ったのかもしれないが、その機会が得られる研究者は幸せかもしれない。

最後になるが、本書の企画を著者に提案した東大出版の光明義文氏は日本哺乳類学会から 2018 年に功労賞を授与されているが、私も含め数多くの生態学の書籍を出版頂いた。その彼も定年を迎えた。この場を借りて、私も光明氏に感謝します。他の出版社にも、生態学関連書籍を手掛けて頂いた多くの編集者がいるが、彼らの後継者となる方が現れるのを心から待ち望む。

松田裕之 (横浜国立大学 / アースウォッチ・ジャパン)



京都大学 生態学研究センター

Center for Ecological Research
Kyoto University

京都市生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel: (077) 549-8200 (代表), Fax: (077) 549-8201
センター長 木庭 啓介

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page: <https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

京都市生態学研究センターニュースのご紹介

～ 2026年7月号の主な掲載内容～

- センター長巻頭言
- 株式会社モンベルと「包括連携協定」を締結
- 石田厚教授退職記念特集
- 新任教員の紹介
- センターを去るにあたって
- 2026年度共同研究a・ワークショップ・研究集会の採択申請決定について
- 2026年度ワークショップ・研究集会の概要
- 2025年度共同利用・共同研究事業の活動報告
- DIWPA だより
- 研究ハイライト
- 2026年度センターの活動予定
- 受賞のお知らせ
- その他のお知らせ

プレスリリースされ、京都大学ホームページ等に掲載された研究成果を「研究ハイライト」のコーナーで紹介しています

生態学研究センターの活動・イベント、公募共同研究事業の募集案内・報告、運営委員会・協議会・共同利用運営委員会の要旨、センター員の研究紹介などを掲載したA4版（カラー印刷）のニュースレターで、年2回（7月・1月）発行しています。センターニュースはバックナンバーを含め、センターホームページの以下のURLからご覧いただけます。

<https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/newsletter.html#ct3>

研究ハイライト

01

“食べやすい虫こぶ”の記憶が、“食べにくい虫こぶ”を守る
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2025-12-10-0>

山尾 億
京都市生態学研究センター・教授

02

ウイルスに感染した植物上でアブラムシの産子数が抑制される
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2025-10-30-1>

大坪 雅
秋田県立大学 助教

03

身近な“ねこじゃらし”で見つかった、アリとの種子散布共生
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2025-12-26-1>

山尾 億
京都市生態学研究センター・教授
大崎 晴菜
名城大学農学部・助教
金子 拓斗
京都大学大学院理学研究科・博士後期課程

04

種子は、植食者の“糞”を手がかりに発芽のタイミングを変える
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2025-12-09-0>

山尾 億
京都市生態学研究センター・教授
大崎 晴菜
名城大学農学部・助教

05

寄生虫の行動操作は河川に栄養素をもたらす—物質循環を駆動するメカニズムの解明に期待—
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2025-12-09-0>

佐藤 拓哉
京都市生態学研究センター・教授
目黒 綾乃
京都市生態学研究センター・機関研究員(研究当時)
現:北海道大学環境科学院・助教



2027年度共同利用事業公募のお知らせ

京都市生態学研究センターは、2010（平成22）年度から『生態学・生物多様性科学における共同利用・共同研究拠点』として活動してまいりました。センターでは生態学の基礎研究の推進と生態学関連の共同研究の推進を目的として、共同研究や研究集会・ワークショップなどの公募を毎年行っています。2027（令和9）年度の公募につきましては11月より開始の予定です。詳細はメイリングリストでご連絡いたします。また、センターホームページにも掲載いたしますのでご参照ください。

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。

新年度の会費は9～12月に請求します。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

退会する際は、前年12月末までに退会届を会員業務窓口まで提出してください。

会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会費の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	基本会費*	大会発表	選挙・被選挙権 (役員・代議員)
正会員（一般）	9500 円	○	○
正会員（学生）	4500 円	○	○
賛助会員	20000 円	×	×

*生態学会では収入の少ない一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施しています。詳細は[ウェブサイト](#)をご覧ください。

【論文投稿の権利】

- | | |
|-----------------------|-----------------|
| ・ 日本生態学会誌 | 正会員のみの有 |
| ・ 保全生態学研究 | 投稿権利は会員に限定されません |
| ・ Ecological Research | 投稿権利は会員に限定されません |

【冊子配布を希望する会誌の追加費用】

- | | |
|-----------|---------|
| ・ 日本生態学会誌 | 2,000 円 |
| ・ 保全生態学研究 | 2,000 円 |

【非会員に向けた学会誌（冊子体）定期購読料】

- | | |
|-----------|---------|
| ・ 日本生態学会誌 | 5,000 円 |
| ・ 保全生態学研究 | 5,000 円 |

問合せ先：一般社団法人日本生態学会 会員業務窓口

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター

E-mail: esj-post@as.bunken.co.jp

Tel: 03-6824-9381 Fax: 03-5227-8631